

雲 へ の 愛 情

— 卷頭言に代えて —

先年ノーベル賞をもらった独逸の文豪ヘルマンヘッセは本当に心から雲を愛する人であるらしい。彼の有名な出世作ペーターカーメンチンド（関泰祐訳、青春の彷徨）の中には主人公ペーターをして語らしめた彼の真情が吐露されている。“広い世界に私以上に雲を識り、雲を愛する者があつたら教えて貰いたい。世界に雲より美しいものがあつたら見せて貰いたい。雲は浮遊であり、眼の慰めであり、雲は祝福であり、神の賜者であり、雲は激昂であり、死の力である。雲は嬰兒の魂のように弱く、柔かく平和であり、優しい天使のように美しく豊かで恵み深く、死の使者のように暗く逃れ難く容赦がない”とまづ謳う。

冒頭の句は筆者をして思わず嫉妬にも似た競争心を起させるが、又一面それほどまでに自信に満ちて雲を愛する同好の士がこの同じ地球上にあることを嬉しくも思う。気象学者たちの中には科学的に雲を研究するばかりでなく、同時に雲への愛情もまた深い人がかなりあるには違いないが、やはり科学者は愛情の表現が下手なのか、それとも出来ないのか、ヘッセのような文章を綴った科学者をまだ知らない。あるいは科学的探究それ自体がそのものに対する愛情の発露ともいえるであろうから科学者と文学者とでは愛情の表現法がおのずから違うだけとも言えるのかも知れない。

西田幾多郎先生が“善の研究”でいっているように知と愛とは一体であるかも知れないのである。とまれヘッセは更に語をついで“雲はあらゆる流浪とあらゆる探求と郷愁の象徴だ。そして雲が天地の間に控え目に憧憬れながら剛情に懸っているように、人間の魂も亦限在と永遠との間に控え目に憧憬れながら剛情に懸っている”という。まことにその通りであろう。一塊の雲のいゆきたじろぎを凝視すれば万物流転の相を感得できるようにさえ思う。筆者はヘッセをライバルとして雲への愛情を彼と競わんかなと思う。筆者が老いらくの恋を笑うなかれ。筆者とても奸悪のざんそに罰せられて格子なき牢獄に呻吟するは常日頃のことであり、また何時如何なることで囹圄の身と

なるやも囚られないのが人の世のさまであるが、方一寸の獄窓から大空に漂う雲を仰ぐことが許されるならば筆者は罰の傷手に耐え得られるであろう。いかほどの世の富をかけ得ようとも大空から隔離された人の世は恐らく筆者にとって絶望的なものであるに違いない。独逸文学者尾崎喜八氏の著書に小冊子“雲”がある。これはささやかな科学書ではあるが、尾崎氏の関心を雲へ向わせたのはヘッセではなかったかと推測する。

ジョンラスキンの 近代画家 にも雲に関する叙述があるのをかねてから聞いているが未見である。近く読むのを楽しみにしている。

佐々倉航三

◇

目 次

地学しずはた 第24号

雲への愛情 —巻頭言に代えて—	佐々倉航三	1
井田火山の地質	増田千鶴子	3
静岡県加茂郡南伊豆町西南部の地質	松井孝友	6
伊豆半島河津町梨本・奥原及び上佐ヶ野の石灰岩について	大久保純男	14
瀬戸川累層群中の超塩基性岩(3)	鮫島輝彦	18
編集後記	飯田久	22